

K-630

山形県長井市埋蔵文化財調査報告書第20集

市内遺跡発掘調査報告書(10)

ほっ きり 掘 切 遺 跡 の 調 査

も ん ど 山 遺 跡 の 調 査

な か さ と 中 里 遺 跡 の 調 査_他

2002年

長井市教育委員会

市内遺跡発掘調査報告書(10)

堀切^{ほっきり}遺跡の調査

もんど山遺跡の調査

中里^{なかつと}遺跡の調査_他

平成14年3月

長井市教育委員会

序

今年度は、埋蔵文化財保護にとって試練の年となりました。国内では一昨年に発覚した前期旧石器時代遺跡のねつ造事件を受けて、これまで疑惑をもたれていた遺跡が再発掘調査の結果、人為的に埋められたものと結論づけられました。ここまで築き上げられた前期旧石器の研究はふり出しに戻ることを余儀なくされたのです。

長井市では民間による開発事業が相次ぎました。土砂採取、大手スーパーの建設、広範囲におよぶ宅地造成など、いずれも大規模開発に係わる緊急発掘や調整に伴う事前調査で長期にわたるものでした。幸いにも開発に携わる方々のご理解とご協力をいただき、遺跡保護にあたりと同時に貴重な成果を得ることができました。

明るい話題もありました。年の瀬も押し迫った昨年12月、長者屋敷遺跡で見つかった4基の半截木柱遺構の性格について國學院大学の小林達雄先生をお招きし検証いただいたところ、縄文人の太陽観測の場と判明しました。これまで古代人の巨木崇拜の跡と推測されてきた巨大木柱が太陽運行を利用した縄文時代の暦である可能性が強まったのです。

埋蔵文化財は土地に密着した文化遺産で、私たちの祖先の歴史を語るかけがえのない貴重な財産です。これらを保存し未来へ継承していくことは、現代に生きる我々の大切な責務と考えます。将来もこのような観点から文化財の保存と活用を推進してゆく所存であります。

最後になりましたが、遺跡保護の調整にご協力いただいた関係者の方々、ならびに悪天候のなか発掘調査に参加くださいましたみなさまに、心より感謝申し上げます。

平成14年3月

長井市教育委員会

教育長 竹田 辰雄

例 言

1 本報告書は、長井市教育委員会が国庫補助を受けて実施した平成13年度以降開発事業における調整ならびに遺跡台帳整備に関する市内遺跡発掘調査報告書である。

2 事業期間は、平成13年4月1日から平成14年3月31日までである。

3 調査体制は次のとおりである。

調 査 員 岩崎義信（長井市教育委員会文化生涯学習課主査）

調 査 員 平吹利数（白鷹町文化財審議委員）
（堀切遺跡）

調査参加者 浅野義一 安部国藏 安部怒雄 安部碩郎 飯沢七郎 伊藤 正 尾形政雄
木島 清 桑原勘一 佐藤伸太郎 色摩晃男 渋谷丈助 孫田八郎 高橋信一
高橋政男 竹田昌市 玉置吉次 沼沢 保 樋口昭二 松木 満 松木大和
渡部健康 綿貫日出男

事務局長 中川輝男（長井市教育委員会文化生涯学習課長）

事務局長補佐 村上和雄（長井市教育委員会文化生涯学習課補佐）

事務局員 岩崎義信（長井市教育委員会文化生涯学習課主査）

事務局員 吉川幸代（長井市教育委員会文化生涯学習課主事）

事務局員 高世博美（長井市教育委員会文化生涯学習課）

4 本調査にあたっては、次の方々のご指導ご協力をいただいた。ここに記して感謝申し上げます。文化庁、山形県教育庁社会教育課文化財保護室、株式会社ヤマザワ、山形おきたま農協同組合、長井市古代の丘資料館、飯沢晋一、孫田八郎、高橋政男（敬称略）

また、報告書を作成するにあたり、（財）山形県埋蔵文化財センター、小林達雄氏よりご教授をいただいた。

5 遺構の縮尺は住居跡1/60・土坑1/40、土器拓影図は1/3、挿図・付図の縮尺はスケールで示した。

6 本書の編集・執筆は岩崎義信が担当し、拓本は古代の丘資料館安部義彦館長の協力を、挿図・図版の作成は高世博美の補助を得た。

目 次

I 調査に至るまで	1
1. 調査の目的	1
2. 調査の方法	1
3. 調査の経過	1
II 開発事業に係る調査	4
(1) 試掘調査の概要	4
5. 南台遺跡	4
6. 館町南地区	5
7. 堀切遺跡	6
(2) 立会調査の概要	10
7. 堀切遺跡	11
III 遺跡台帳整備に係る調査	26
8. もんど山遺跡	26
9. 中里遺跡	32
10. 長者屋敷遺跡	40

報告書抄録 巻末

挿 図 目 次

第1図 調査箇所位置図	3
第2図 南台遺跡概要図	4
第3図 館町南地区概要図	5
第4図 堀切遺跡概要図	6
第5図 堀切遺跡トレンチ概要図(1)	8
第6図 堀切遺跡トレンチ概要図(2)	9
第7図 堀切遺跡遺構配置図	11・12
第8図 1号住居跡	13
第9図 1号住居跡出土土器	14
第10図 2号住居跡	14
第11図 2号住居跡出土土器	15
第12図 3号住居跡	15
第13図 3号住居跡出土土器	16
第14図 1～4号土坑	17
第15図 土坑出土土器	18

第16図 包含層出土土器拓影図	19
第17図 もんど山遺跡概要図	26
第18図 もんど山遺跡土器実測図・拓影図	28
第19図 もんど山遺跡土器拓影図	29
第20図 中里遺跡概要図	32
第21図 中里遺跡土器実測図・拓影図(1)	35
第22図 中里遺跡土器拓影図(2)	36
第23図 中里遺跡土器拓影図(3)	37
第24図 長者屋敷遺跡概要図	40
第25図 4本柱跡と「日の出・日の入」概要図	41

表 目 次

第1表 調査工程表	2
第2表 ビット一覧表	20

図 版 目 次

図版1 南台遺跡	4
図版2 館町南地区	5
図版3 堀切遺跡	7
図版4 堀切遺跡近景	10
図版5 堀切遺跡(1)	21
図版6 堀切遺跡(2)	22
図版7 堀切遺跡(3)	23
図版8 堀切遺跡出土遺物(1)	24
図版9 堀切遺跡出土遺物(2)	25
図版10 もんど山遺跡	27
図版11 もんど山遺跡出土遺物(1)	30
図版12 もんど山遺跡出土遺物(2)	31
図版13 中里遺跡概要図	33
図版14 中里遺跡出土遺物(1)	38
図版15 中里遺跡出土遺物(2)	39
図版16 長者屋敷遺跡(1)	42
図版17 長者屋敷遺跡(2)	43

I 調査に至るまで

1. 調査の目的

本市では昭和57年から行った遺跡詳細分布調査を発端にし、市内全域にわたる分布調査を実施してきたところ、現在まで216箇所の遺跡を把握しているが近年時代の要求に伴い、遺跡が存在する地域にも開発がおよぶようになってきた。本調査は開発事業との調整を図り、事前に遺跡の保護にあたることを目的としたものである。対象となる開発事業の内容は本市が行う公共事業と宅地造成をはじめとする民間開発事業が主体となる。

また、周知の遺跡はほとんどが表面踏査で確認したものである。そのため遺跡の範囲・性格・年代等を明らかにする目的から一部試掘調査を実施し、記録として保存にあたり遺跡台帳の整備につとめた。

2. 調査の方法

調査は内容・目的から次の方法で実施した。

(1) 現地踏査

遺跡の周辺が開発範囲に含まれる場合や、現在遺跡として登録されていない地域でも、開発事業予定区域が広範囲におよぶ場合は現地踏査、聞き取り調査を行い遺跡の有無の確認にあたり、開発事業と遺跡保護の調整にあたる。

(2) 試掘調査

周知の遺跡が開発事業予定区域に含まれる場合や、遺跡周辺に開発がおよぶ場合には坪掘りやトレンチ掘りを行い、遺構・遺物の広がりを確認し、さらに遺構検出面までの深さを把握し開発事業と遺跡保護の調整を図る。

また、遺跡台帳整備の目的から、これまで表面踏査による推定遺跡範囲に坪掘りやトレンチ掘りを行い、遺構・遺物の検出にあたり遺跡の範囲・性格・年代等を明らかにし、遺跡台帳の補筆にあたる。

(3) 立会調査

開発事業において遺跡におよぼす影響が軽微な場合は、工事施工に立ち会って調査を行う。発見された遺構・遺物は記録保存を行う。

3. 調査の経過

長井市教育委員会はこれまで行ってきた分布調査をもとに遺跡地図を作成しており、この地図を開発を担当する関係機関に配布し、今後計画される各種開発事業にさきがけて埋蔵文化財に関するヒアリングを実施し、必要に応じ上記の調査を実施した。また、民間開発についても随時受付を行っており、開発に係る事前調査依頼の受け入れ態勢を組織し、同様の調査を行った。

その結果、本年度の調査は11件の問合せ件数中7遺跡が該当した。内訳は民間開発に係る調査が4件、遺跡台帳整備に係る調査が3件で、公共事業に関する調査は1件もなかった。民間の大規模造成事業が増大したのが特色といえる。

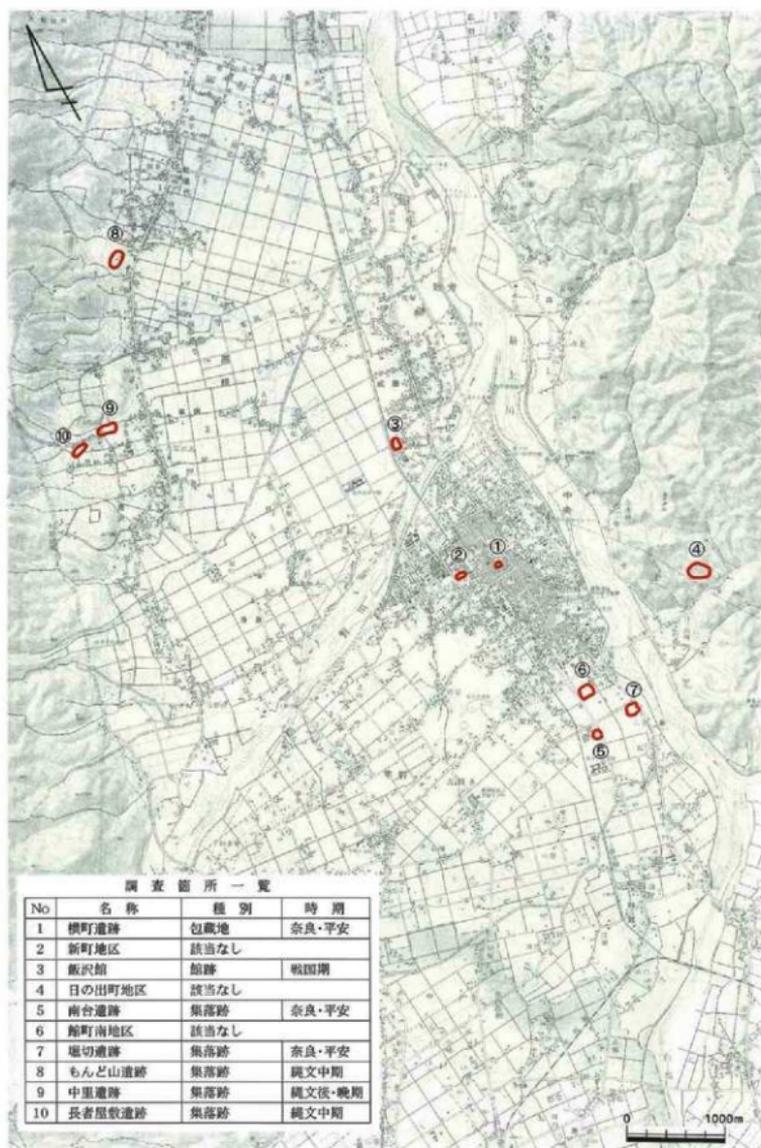
なお、現地調査の行程と、ヒアリングに係る調査の内容は次のとおりである。

調 査 工 程 表

日 程 内 容	平 成 13 年									平 成 14 年		
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
現地踏査												
試掘調査												
立会調査												
報告書作成												

埋蔵文化財ヒアリング一覧

事 業 種 別	遺跡名(地区番号)	調査区分	種別	時 期	備 考
宅地開発に係る調査	横町地区(①)	現地踏査	該当なし		民間開発
	館町南地区(⑥)	試掘調査	該当なし		民間開発
各種造成に(社屋) 係る調査 (資材置場) (ビジネスホテル) (スーパー)	新町地区(②)	開取り	該当なし		民間開発
	飯沢館(③)	現地踏査	船跡	戦国期	民間開発
	南台遺跡(⑤)	試掘調査	集落跡	奈良・平安	民間開発
	堀切遺跡(⑦)		試掘調査	集落跡	奈良・平安
立会調査			集落跡	奈良・平安	新規発見
土砂採取に係る調査	日の出町地内(④)	開取り	該当なし		民間開発
遺跡台帳整備に係る調査	中里遺跡(⑨)	試掘調査	集落跡	縄文後・晩期	
	もんど山遺跡(⑧)	試掘調査	集落跡	縄文中期	新規発見
	長者屋敷遺跡(⑩)	試掘調査	集落跡	縄文中期	



第1図 調査箇所位置図

Ⅱ 開発事業に係る調査

(1) 試掘調査の概要

5. 南台遺跡

所在地 長井市台町地内

調査期間 平成13年11月5日

起因事業 ビジネスホテル造成工事

遺跡環境 長井市街地の西部、最上川の河岸段丘上に位置し、以前から土師器や須恵器の出土が伝えられ、高台一帯が遺跡の範囲となっている。近年になり、宅地やアパート等民間開発が急速に進んでいる区域である。

調査状況 開発予定区域に2×5mのトレンチを任意に4箇所設定し地山直上まで重機を用いて掘り下げ、遺構・遺物の検出にあたった。

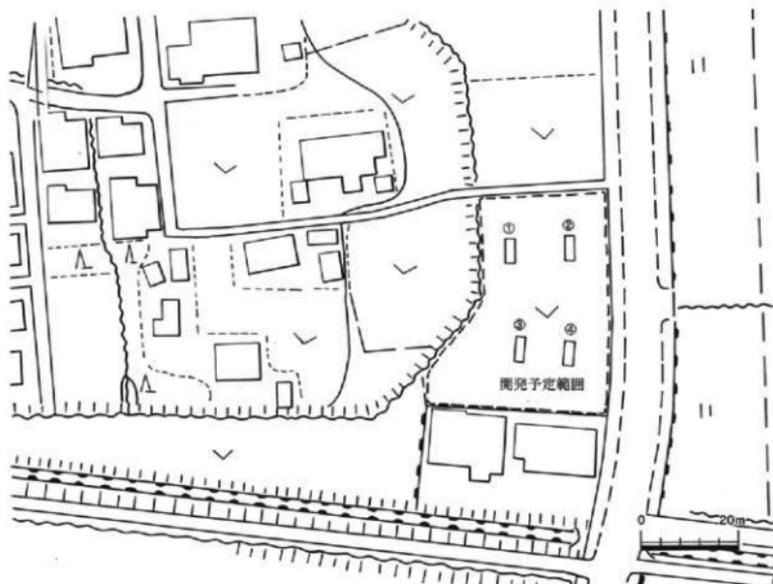
調査結果 当該遺跡に係る遺構・遺物は検出されなかった。遺跡の中心は開発予定地の西側の河岸段丘上と推測され、当該区域に遺跡が及んでいない旨、開発側に報告した。



上：調査区近景 下：4トレンチ



図版1 南台遺跡



第2図 南台遺跡概要図

6. 館町南地区

所在地 長井市館町南地区

調査期間 平成13年10月11日～12日

起因事業 宅地造成工事

遺跡環境 長井警察署の北東部に位置する。一帯は水田地帯のため、分布調査がおよんでいない地域である。聞き取り調査によると基盤整備以前は小河川が作り出した自然堤防で、随所に微高地が見られた土地であった。

調査状況 開発予定区域約13,000㎡に1.5×10mのトレンチを任意に17箇所設定し、重機を用いて地山層まで掘り下げ、遺構・遺物の検出にあたった。

調査結果 各トレンチの地山層までの深さを見ると、調査区の北および西に向かうほど深く、南東側が浅い傾向が見られるが、遺跡に係る遺構・遺物は検出されなかった。

したがって、当該区域から遺跡が発見されなかった旨、開発側に報告した。



上：調査区近景 下：14トレンチ



図版2 館町南地区



第3図 館町南地区概要図

7. 堀切遺跡

所在地 長井市館町南字堀切

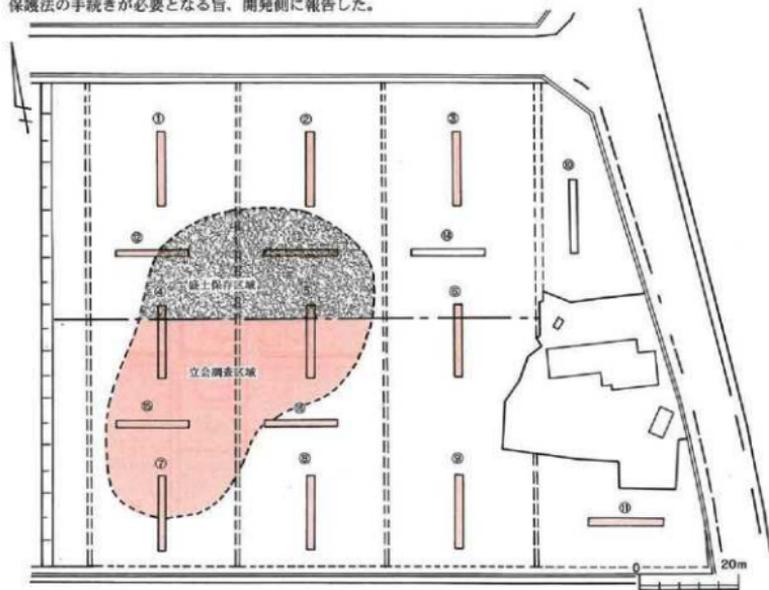
調査期間 平成13年5月8日～9日

起因事業 スーパーマーケット造成工事

遺跡環境 長井市南部の泉地区との境に位置する平坦地で、一帯は水田地帯のため分布調査がおよんでいない地域であり、遺跡として未登録の場所である。国道287号線に隣接し、東側を流れる最上川によって形成された河岸段丘には、東西に走る中小河川が発達しそのため自然堤防が随所に形成され、基盤整備が行われる以前は微高地による起伏が見られた場所だという。

調査状況 当該区域を表面踏査したところ多数の須恵器片を採集したため、試掘調査を実施した。開発予定範囲約12,000㎡に1.5×15mのトレンチを合計16箇所設定した。すなわち東西方向に6箇所、南北方向に10箇所のトレンチを20mから10m間隔に設定し、重機を用いて地山層まで掘り下げ、手掘りによる精査を行い遺構・遺物の検出にあたった。

調査結果 試掘調査の結果10・14を除くトレンチから遺構が、5・7・11・12・15トレンチから遺物が出土した。しかし地山層までの深さが現地表面から20cmと浅く、遺構を検出してもピット状の遺構以外は覆土が5cm未満ときわめて浅く出土遺物もない。これらのことから当該区域は新規発見の遺跡ではあるが、昭和50年代に行われた基盤整備で削平を受けたものと考えられ、遺構および包含層の遺存状況、遺物の出土状況から遺跡の範囲を凡そ35×75mの範囲とした。以上のことから当該区域に開発行為がおよぶ場合には文化財保護法の手続きが必要となる旨、開発側に報告した。



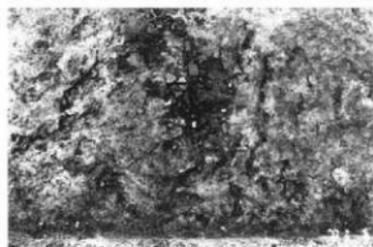
第4図 堀切遺跡概要図



堀切遺跡近景



13トレンチ遺構検出状況



13トレンチ一括土器出土状況

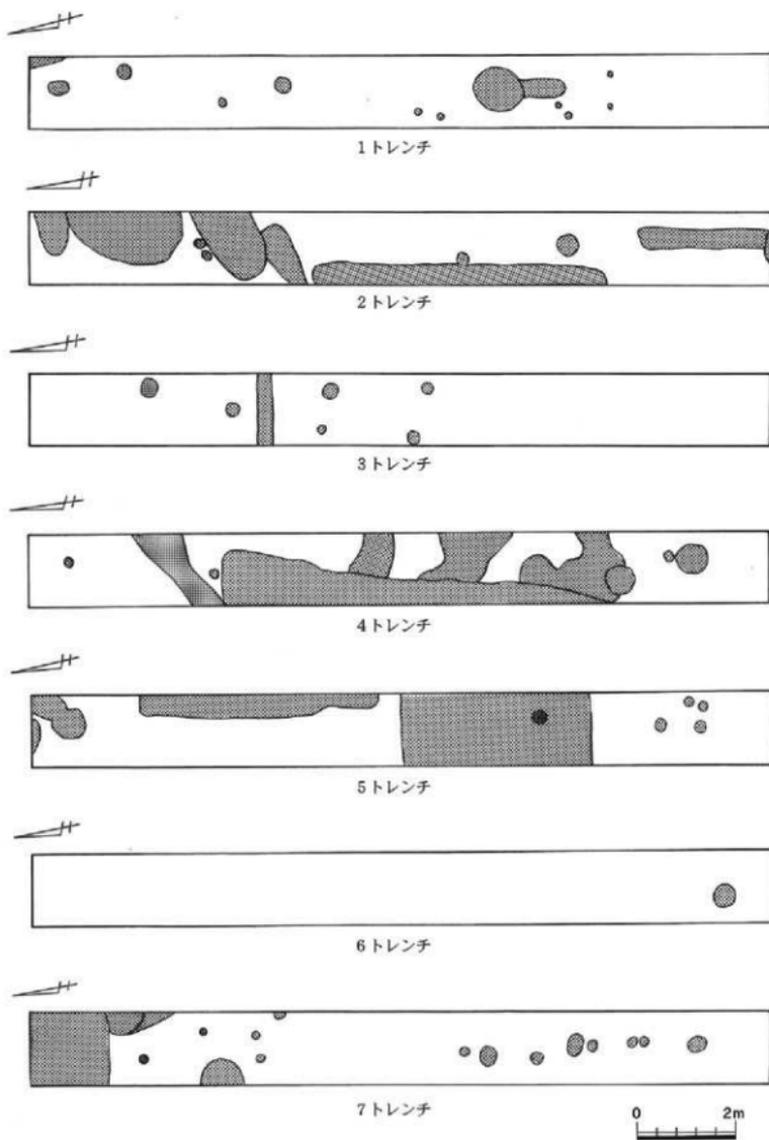


3トレンチ

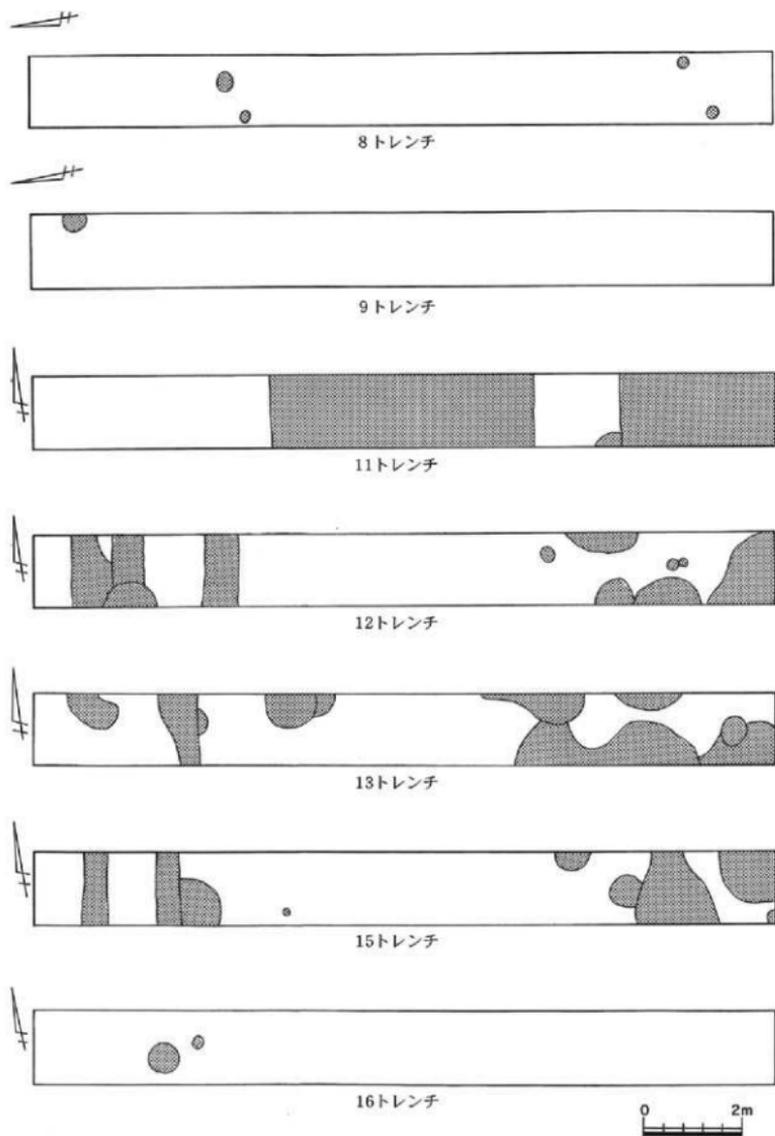


3トレンチ柱穴検出状況

図版3 堀切遺跡



第5図 堀切遺跡トレンチ概要図(1)



第6図 堀切遺跡トレンチ概要図(2)

(2) 立会調査の概要

7. 堀切遺跡

所在地 長井市館町南字堀切

起因事業 スーパーマーケット造成工事（前項の試掘調査を受けて）

調査期間 平成13年8月6日～31日

調査結果 竪穴住居跡3棟、土坑4基、ピット171基を検出し記録保存にあたった。また、出土遺物は整理箱にして5箱を数える。

住居跡は覆土が残っていたものは1・3号住居跡で、そのうち1号住居跡は攪乱の掘り込みを受け覆土の堆積は数センチを残す程度であった。2号住居跡は浅い周溝の検出で住居跡と確認した。

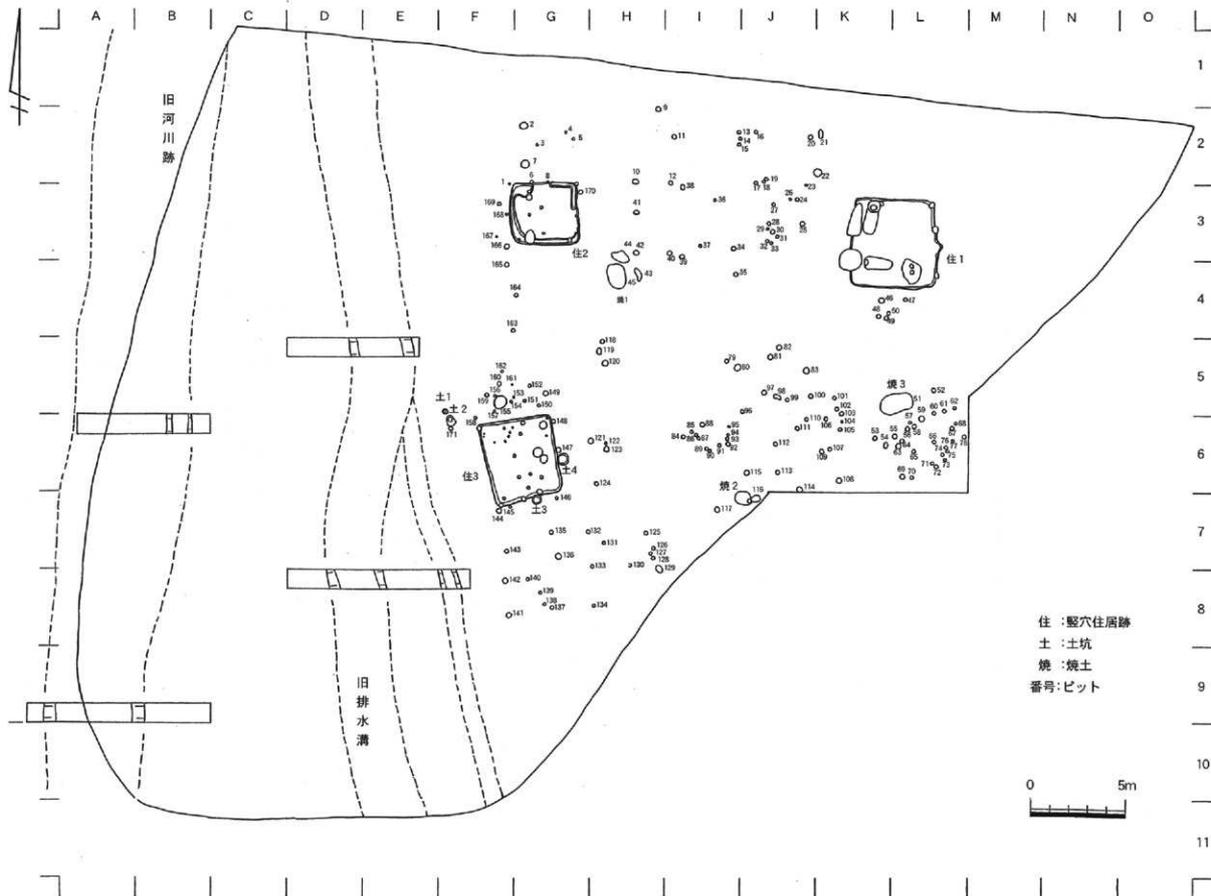
土坑は調査区中央部で検出した。1～3号土坑土器が出土し、1号土坑では裏の底部が埋設した状態で出土し、3号土坑ではミニチュア土器が出土した。

ピットは171基検出した。L-6区では密集した状態でピットが検出されたが、規則的な配列が見られず、建物跡や住居跡の確認には至っていない。

このたびの調査では昭和50年代に行われた基盤整備のため、遺跡の大半が破壊を受けたものと推測されたが、住居跡をはじめ多数の遺構が検出された。旧河川跡と住居跡の発見により集落が自然堤防上に立地していたと推測され、土地改良以前の地形を想定することが可能である。また、出土した遺物の特徴から平安時代前半の須恵器が主体を占めるが一部奈良時代末に比定される土器の出土もあり、複数の時期にわたる遺跡であることも判明した。本市における初の平安時代集落跡の発見事例となる。



図版4 堀切遺跡近景



住：竪穴住居跡
 土：土坑
 焼：焼土
 番号：ピット



第7図 堀切遺跡遺構配置図(1:200)

(1) 竪穴住居跡

1号住居跡 (第8図、図版5)

位置 K・L-3・4に位置する。

遺存状況 基盤整備で削平を受けたため覆土の堆積が薄く、西壁付近に攪乱が見られる。東側の遺存状況は比較的良好で覆土の堆積も10~13cmを測る。

平面形 方形を呈する。

規模 東西4.5m、南北4.5mを測る。

主軸方向 東壁のカマドを基準に対称方向を設定するとS-86°-Eを指針する。

壁 開きぎみに立ち上がるものと推測され、遺存状態の良い東側では10cmの壁高を測る。

床面 青灰色粘質土を床面とし、南側では凹凸が見られる。

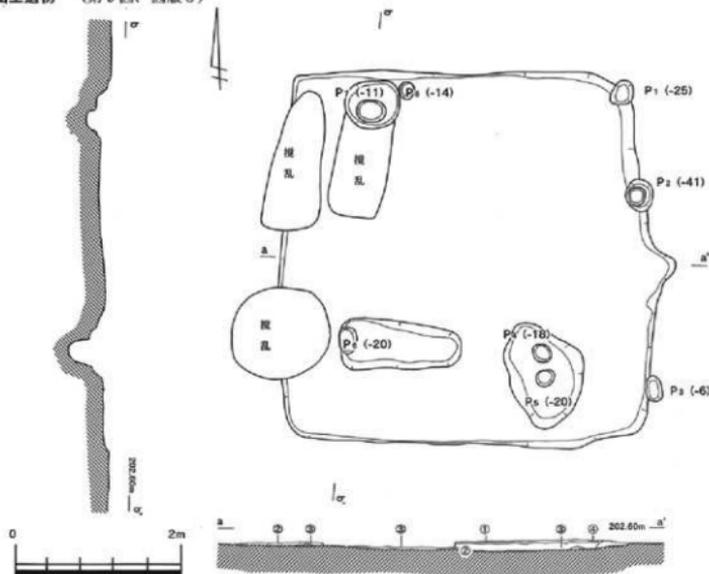
柱穴 8基検出されたが、壁際に沿うものやコーナーに掘り込まれるなど規則性は見られない。規模は径20~40cm、深さ6~41センチを測る。

周溝 検出されなかった。

カマド 東壁中央部に凸部が検出され、周囲から炭化物を多量に含む土質や焼土を検出した。掘り込みや壁、煙道は検出されなかったがカマド跡と推定される。

覆土 ①層：暗茶褐色土 耕作土。②層：暗灰茶褐色土 炭化粒子を多量に含む粘質でしまりある土質。③層：暗灰褐色土 砂質土。④層：灰茶褐色土 炭化物を多量に含む。

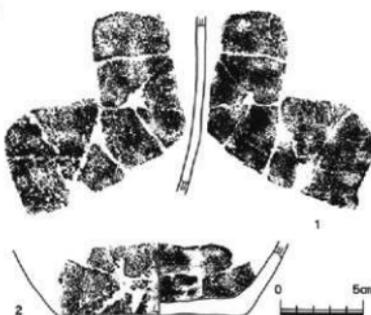
出土遺物 (第9図、図版8)



第8図 1号住居跡

住居跡南半で一括土器が出土した。土師器甕がブロックをなして数個体分検出されたほか、須恵器4点が出土したがいずれも小破片である。土師器はへら状工具による切り離し痕か調整跡を残す底部破片が2点見られ、9世紀前葉に含まれる。土師器甕は摩滅が著しく遺存状態は悪い。口縁部形態は「く」の字状を呈する長胴甕で器壁の内外面に刷毛痕が見られ底部の厚さは5~6mmと薄手で、低部には編物の圧痕が見られる。

時期 上記の出土資料から、本住居跡の時期は9世紀前半代に比定されよう。



第9図 1号住居跡出土土器

2号住居跡 (第10図、図版5)

位置 F・G-3区に位置する。

遺存状況 一部削平を受けている。

平面形 ほぼ方形を呈する。

規模 東西3.6m、南北3.3mを測る。

主軸方位 東壁のカマドを基準に対称方向を設定するとN-90-Eを指針する。

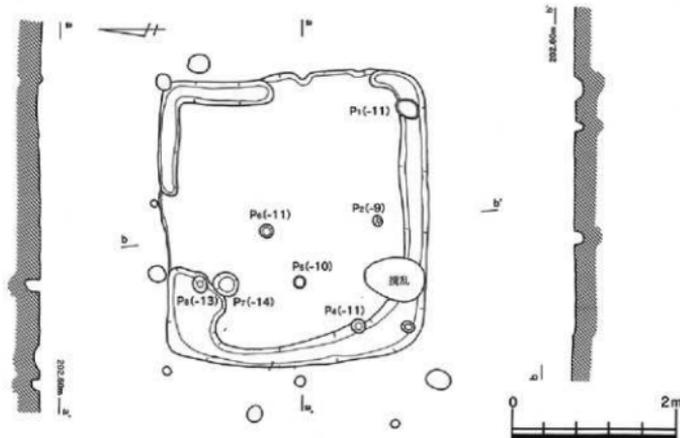
壁 北と東でわずかに検出されたが、詳細は不明。

床面 青灰色粘質土を床面とし、平坦な床である。

柱穴 8基検出されたが、規則性は見られない。規模は径13~30cm、深さ8~14cmを測る。

周溝 壁面に沿って巡る。断面は円弧状を呈し、幅約20~70cm、深さ10cmを測る。

カマド 東壁の周溝が途切れる箇所炭化物を多量に含む焼土を検出し、壁際に沿って焼土塊や土器片がまをもって出土した。掘り込みや壁、煙道は検出されなかったがカマド跡と推定される。



第10図 2号住居跡

出土遺物 (第11図、図版8)

カマド周辺から土師器片が12点出土し2点を図示したが、摩滅が著しく遺存状態は良くない。長胴甕の破片が胴部には両面に刷毛痕が見られる。

時期 良好な遺物の出土がないため時期を特定することは困難であるが、主軸方向が1号住居跡ときわめて近いこと、出土遺物が奈良時代末から平安時代前半期にかけての所産であり、本跡も当該時期に比定されよう。

3号住居跡 (第12図、図版6)

位置 F・G-6・7区に位置する。

重複関係 3号土坑と重複し、本住居跡が古い。

遺存状況 良好である。

平面形 ほぼ方形を呈する。

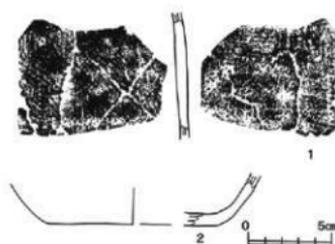
規模 東西4.3m、南北3.8mを測る。

主軸方向 壁のカマドと対称方向に基準を求めるとN-12°-Wを指針する。

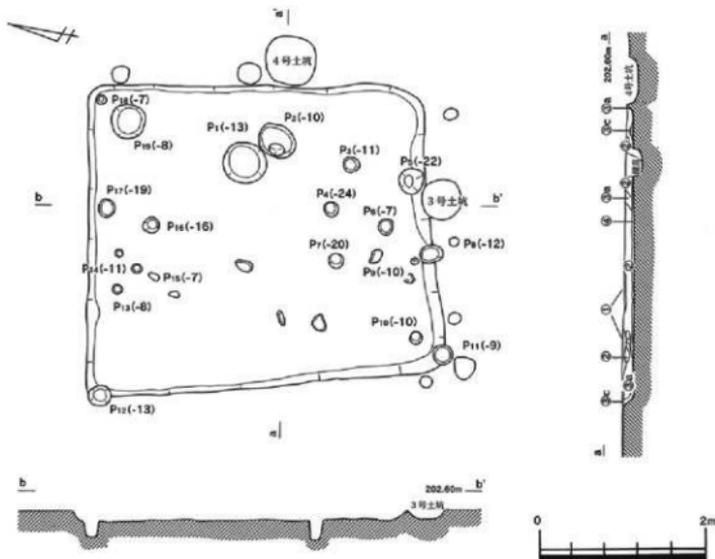
壁 開きぎみに立ち上がり、最大壁高15cmを測る。

床面 平坦な青灰色土を床面とする。

柱 穴 18基を検出したが規則性を見出せず配置は不明。規模は径約10~54cm、深さ7~24cmを測る。



第11図 2号住居跡出土土器



第12図 3号住居跡

周溝 検出されなかった。

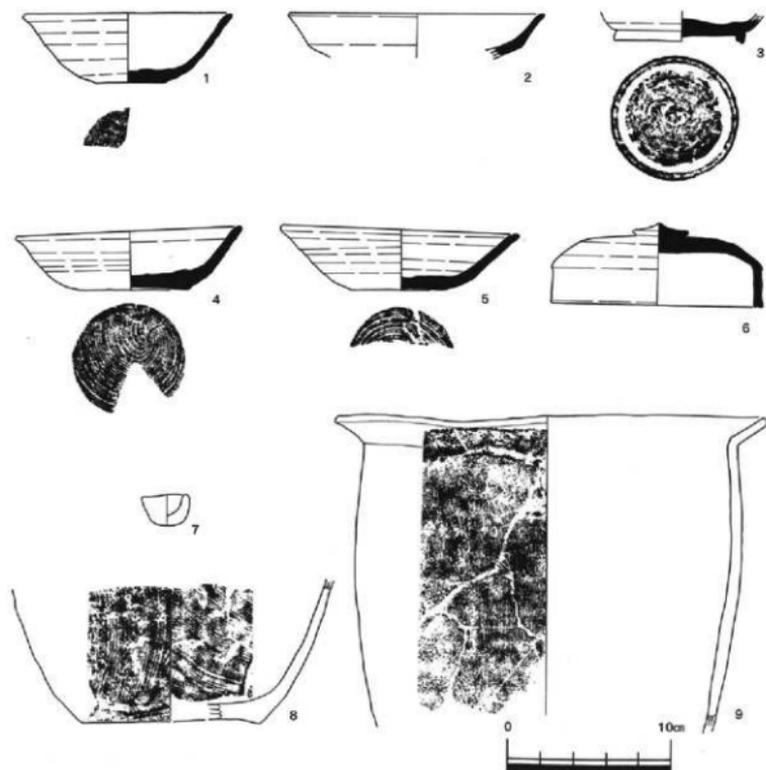
カマド 南壁の中央部に炭化物を多量に含む土質と焼土が検出された。カマドの可能性はある。

覆土 ①層：明褐色土 旧水田の基盤。②層：灰茶褐色土 褐色土に黒褐色土をブロック状に含みしまりありかたい土質。③a層：灰褐色土 褐色土に黒褐色土をブロック状に含む砂質土。③b層：灰褐色土 ③a層より明るい砂質土。③c層：灰褐色土 ③a層に比べると黒褐色土ブロックの割合が少ない。④層：暗灰褐色土 径約5cm前後の黒褐色土ブロックを多く含む。

出土遺物 (第13図、図版24・25)

須恵器12点、土師器類83点が出土し、9点を図示した。1・4・5は須恵器坏で、1の底部はへら状工具による調整が見られ、4・6の底部は回転糸切りの痕跡が残る。2は底部を欠損するが高台杯の種柄で8世紀後半に多く見られる器形である。3は須恵器の高台杯坏で底部は回転へら切りによる痕跡を残す。

6は須恵器蓋で器高が高く短頸壺の蓋である。7～9は土師器類で、7は手ずくねのミニチュア土器である。



第13図 3号住居跡出土土器

9は口縁が「く」の字状を呈する長胴甕で刷毛痕を残す。8は長胴甕の底部破片で内外両面に刷毛痕が見られる。また、樹脂状の塗膜の付着が認められる須恵器片も出土している。塗膜は坏の内側全面と側面から底部にかけて部分的に見られ、暗茶褐色を呈しきわめて薄く光沢を伴うことから漆と考えられる(図版8-10)。漆塗りの際に小分けした漆液をいれるパレットと推測され、坏底部には回転糸きり痕を残す。本遺跡で漆塗りが行われていた可能性がある。

時期 図示した遺物は、回転ヘラ切りの底部をもち器壁の立ち上がりがゆるやかな須恵器(1・3)と、回転糸切りで底径が小さく器壁の立ち上がり角度が大きい須恵器(4・5)に大別され、前者は古く後者は新しい時期に属する。また、高台坏の稜輪は前者に近い時期の所産と考えられる。これらのことから本住居跡は8世紀後葉から9世紀前半期に比定されよう。

(2) 土坑

1号土坑(第14図、図版7)

位置 F-5区に位置する。

重複関係 なし。

遺存状況 壁の上部は基盤整備で削平を受けている。

平面形 楕円形を呈する。

規模 長軸60cm、短軸50cmを測る。

壁 開きぎみに立ち上がり、最大壁高15cmを測る。

出土遺物(第15図、図版9)

土師器の埋設土器が検出された。長胴甕の胴部下位から底部にかけて正位の状態に埋設され、覆土には口縁部が「く」の字状を呈する土師器破片出土した。土師器の内外両面には刷毛痕が見られる。

時期 1号住居跡出土の土師器長胴甕の口縁部と同様の形態を呈することから、9世紀前葉に比定される。

2号土坑(第14図、図版7)

位置 F-5・6区に位置する。

重複関係 なし。

遺存状況 壁の上部は基盤整備で削平を受けている。

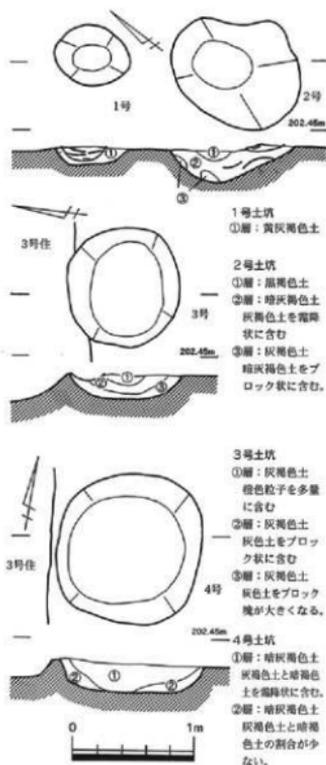
平面形 楕円形を呈する。

規模 長軸110cm、短軸90cmを測る。

壁 開きぎみに立ち上がり、最大壁高25cmを測る。

出土遺物(第15図、図版9)

須恵器坏と内面黒色処理の土師器、それに口縁部が「く」の字状を呈する土師器長胴甕の破片の3点が出土した。坏の底部には回転糸切りの切り離し痕が見られ、低部径も小さい。



第14図 1~4号土坑

3は内面黒色処理の土師器で器壁の立ち上がり角度も大きい。これらの出土遺物は9世紀前半比定される。

時期 出土遺物から9世紀前半に比定される。

3号土坑 (第14図、図版7)

位置 G-7区に位置する。

重複関係 3号住居跡と重複し、本土坑が新しい。

遺存状況 壁の上部は基盤整備で削平を受けている。

平面形 楕円形を呈する。

規模 長軸96cm、短軸90cmを測る。

壁 開きぎみに立ち上がり、最大壁高20cmを測る。

出土遺物 (第15図、図版9)

3点出土し、須恵器と手づくねのミニチュア土器を図示した。1は底部に回転糸切り痕を残し、緩やかな器壁の立ち上がりをもつ。2は器全体に指頭痕を残し低部が肥厚した器形である。

時期 出土遺物から9世紀前半に比定される。

4号土坑 (第14図、図版7)

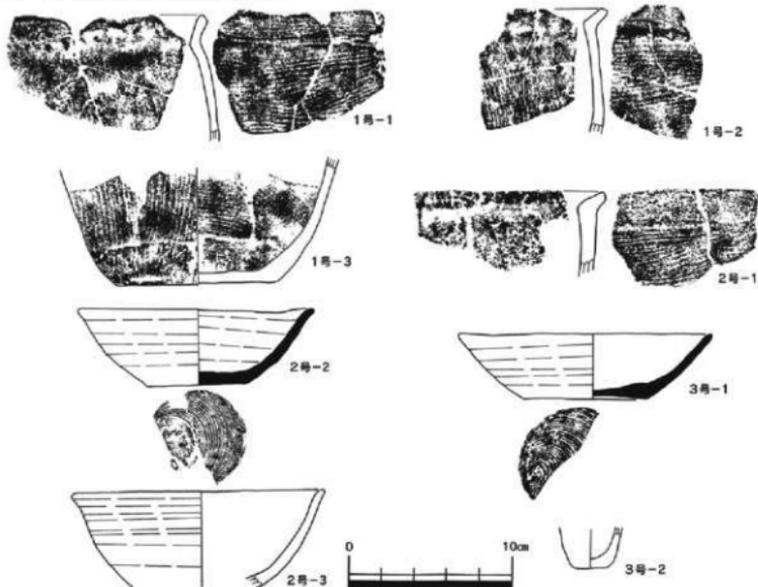
位置 G-6区に位置する。

重複関係 なし。

遺存状況 壁の上部は基盤整備で削平を受けている。

平面形 楕円形を呈する。

規模 長軸122cm、短軸95cmを測る。



第15図 土坑出土土器

壁 開きぎみに立ち上がり、最大壁高22cmを測る。

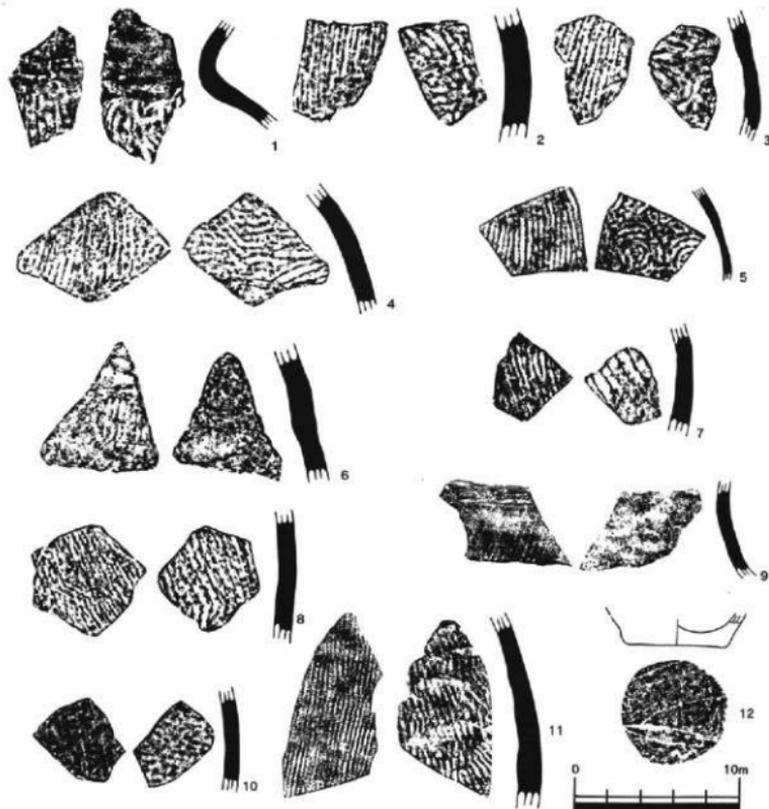
出土遺物 なし。

時期 出土遺物全般から8世紀末から9世紀前半の範疇に含まれる。

(3) 包含層出土遺物

全域調査区から土師器・須恵器が整理箱で2箱出土したが、いずれも小破片であるため比較的遺存状態の良い12点を図示した。(第16図、図版9)

1～11は須恵器の甕である。1は口縁が「く」の字状を呈する頸部破片である。2～8・11は胴部破片で外面には叩き痕内面にはアテ痕が見られる。9は頸部破片、10は胴部破片で内外面ともに刷毛痕が見られる。12は土師器甕の底部で、内面には刷毛目、外面には葉の葉脈痕が見られる。出土遺物全般から、8世紀末から9世紀前半の範疇で捉えることができる。

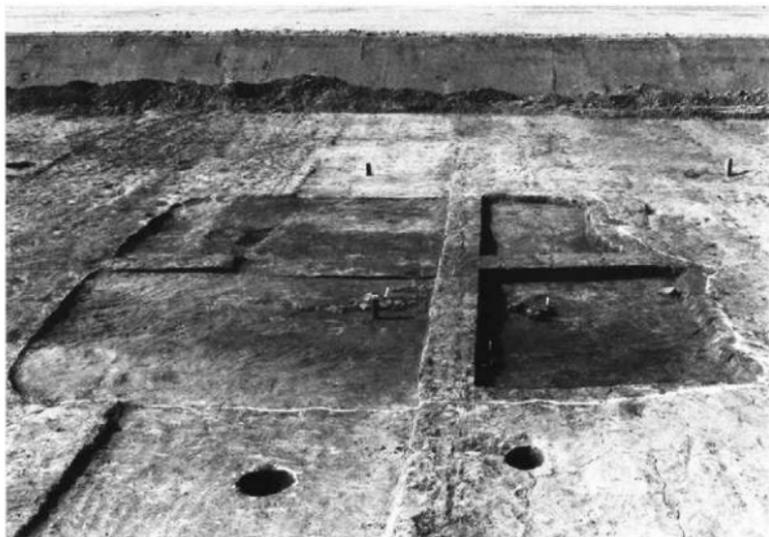


第16図 包含層出土土器拓影圖

ビット計測一覧表

(単位: cm)

No	長	径	深さ	位置	No	長	径	深さ	位置	No	長	径	深さ	位置
1		10	5.2	F-2	58		22	25.8	L-6	115		26	8.3	J-6
2		43	14	F-3	59		30	18.5	L-6	116		130	19.4	J-7
3		12	-	F-4	60		16	19.2	L-6, L-5	117		25	11	I-7
4		14	12.5	F-5	61		14	26.1	L-5	118		22	18.6	H-5
5		14	13.3	F-6	62		16	14.6	L-5	119		33	5.5	H-5
6		18	6.7	F-7	63		28	29.4	L-6	120		32	21.6	H-5
7		38.5	15	F-8	64		22	16.7	L-6	121		30	21.4	H-6
8		8	6.6	F-9	65		18	6.3	L-6	122		19	10.5	H-6
9		26	10.4	F-10	66		16	11.9	L-6	123		13	6.7	H-6
10		32	37.7	F-11	67		18	11.1	L-6	124		28	14.1	H-6
11		28	16.4	F-12	68		16	13.4	L-6	125		22	32.8	H-7
12		23	12	F-13	69		28	31.1	L-6	126		22	31.5	H-7
13		18	7.7	F-14	70		20	9.3	L-6	127		16	14.8	H-7
14		16	5.5	F-15	71		17	16.4	L-6	128		16	8.6	H-7
15		16	19.5	F-16	72		20	25	L-6	129		43	11.9	H-7
16		24	6.4	F-17	73		14	10	L-6	130		18	10.4	H-7
17		21	12.1	F-18	74		16	23.4	L-6	131		20	25.7	H-7
18		14	11.3	F-19	75		18	10.8	L-6	132		22	18.5	H-7
19		20	14.9	F-20	76		15	5.1	L-6	133		18	19.8	H-7
20		22	19.3	F-21	77		16	6.4	L-6	134		17	19.4	H-8
21		44	11.3	F-22	78		18	8.5	L-6	135		20	17.6	G-7
22		43	15.5	F-23	79		22	16.8	I-5	136		30	29.7	G-7
23		14	30.7	F-24	80		32	6.6	I-5	137		22	10.6	G-8
24		22	27.5	F-25	81		28	6.1	J-5	138		16	8	G-8
25		24	25.5	F-26	82		26	12.2	J-5	139		14	7.5	G-8
26		14	20.2	F-27	83		32	20.7	J-5	140		17	15.4	G-8
27		16	21.6	F-28	84		22	13	I-6	141		30	12.2	F-8
28		19	10.5	F-29	85		20	12.1	I-6	142		26	7.8	F-8
29		14	6.7	F-30	86		21	12.9	I-6	143		16	5.4	F-7
30		28	37.6	F-31	87		18	6.5	I-6	144		27	11.2	F-7
31		18	28.9	F-32	88		28	15.4	I-6	145		15	7.4	F-7
32		17	12.9	F-33	89		18	11.4	I-6	146		15	15.1	G-7
33		14	12.4	F-34	90		17	8.7	I-6	147		27.5	13.3	G-6
34		22	-	F-35	91		19	10.1	I-6	148		20	9.4	G-6
35		20	20.2	F-36	92		22	7	I-6	149		27	16	G-5
36		12	-	F-37	93		17	8.9	I-6	150		18	14.3	G-5
37		-	-	F-38	94		16	12.1	I-6	151		16.5	12.6	G-5
38		30	13.8	F-39	95		16	14	I-6	152		19.5	5.5	G-5
39		14	29	F-40	96		19	17.4	J-5	153		13	7	F-5
40		25	12.3	F-41	97		24	14.5	J-5	154		13.5	15.1	F-5
41		28	11.9	F-42	98		21	26	J-5	155		72	6.8	F-5
42		28	24.7	F-43	99		20	30.7	J-5	156		16	26	F-5
43		70	5.8	F-44	100		27	18.8	J-5	157		11	8.6	F-5
44		攪	乱	F-45	101		20	19.9	K-5	158		15.5	4.7	F-5
45		132	焼土	F-46	102		16	8.8	K-5	159		23	16.7	F-5
46		29	27	F-47	103		23	12.7	K-5	160		25	18.9	F-5
47		20	14.9	F-48	104		14	15.2	K-6	161		10	9.3	F-5
48		24	14.1	F-49	105		20	14.5	K-6	162		15	14.6	F-5
49		23	26.5	F-50	106		23	14.8	K-6	163		20	18.7	F-4
50		21	24.1	F-51	107		20	4.9	K-6	164		17	8.8	G-4
51		176	焼土	F-52	108		28	15.1	K-6	165		24	10.4	F-4
52		20	11.8	F-53	109		24	29.5	K-6	166		28	11.5	F-3
53		24	18.9	F-54	110		16	15.7	J-6	167		11	10.9	F-3
54		30	15.3	F-55	111		20	10.5	J-6	168		13	-	F-3
55		22	24.9	F-56	112		20	19.7	J-6	169		18	20.1	F-3
56		20	14.6	F-57	113		18	9.1	J-6	170		23	21.2	G-3
57		16	8.5	L-6	114		30	27	J-6	171		24	20.2	F-6



1号住居跡

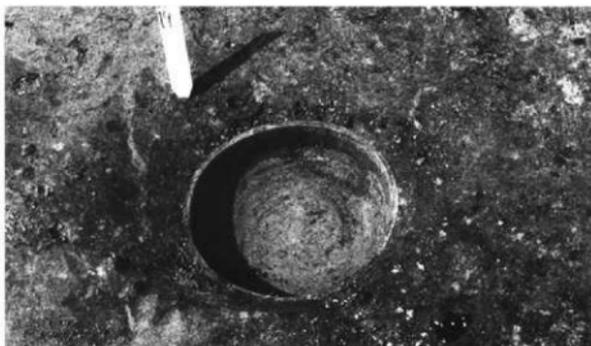


2号住居跡

図版5 堀切遺跡(1)



3号住居跡
検出状況

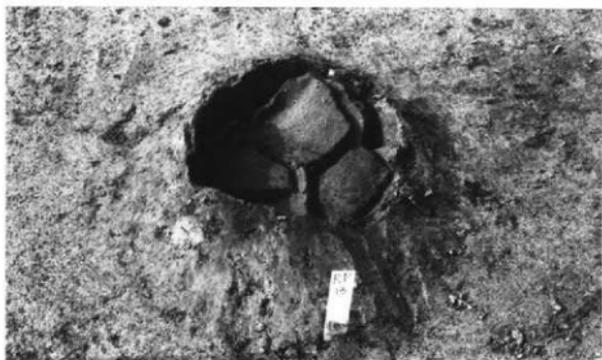


3号住居跡遺物出土状況



3号住居跡

図版6 堀切遺跡(2)



1号土坑
土器検出状況



2号土坑
半截状況



3号土坑
半截状況

図版7 堀切遺跡(3)



1号住居跡



2号住居跡



1



3



5



2



4



6



7



8



9



10

3号住居跡

図版8 堀切遺跡出土遺物(1)



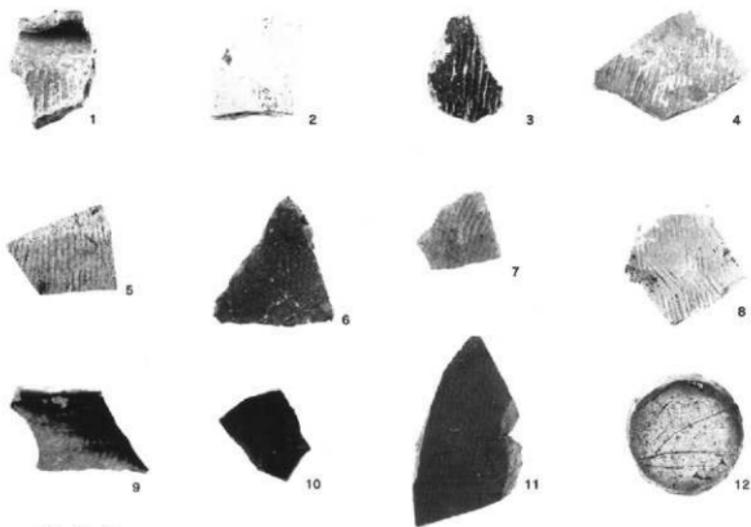
1号土坑



3号土坑



2号土坑



包含層

図版9 堀切遺跡出土遺物(2)

Ⅲ 遺跡台帳整備に係る調査

8. もんど山遺跡

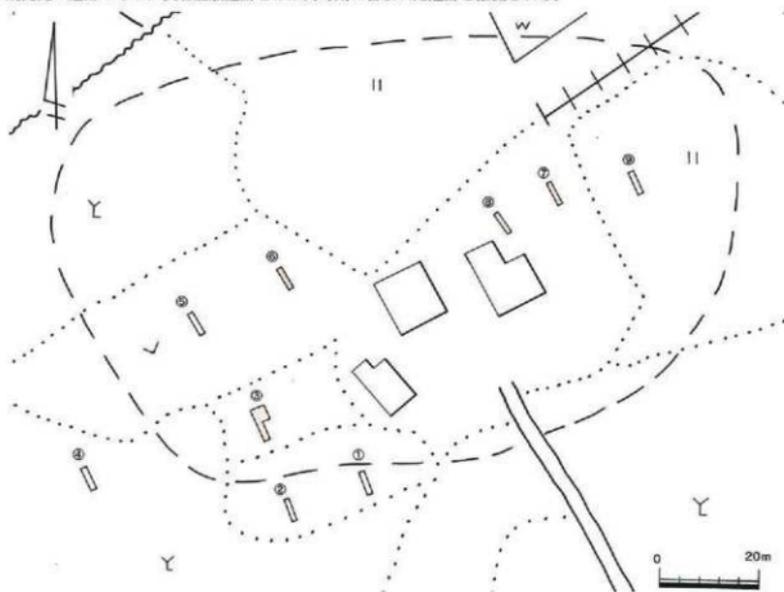
所在地 長井市助進代字岡地内

調査期間 平成13年11月20日～22日

遺跡環境 長井市街地の北西部、県道長井・飯豊線沿いの草岡地区に隣接する高台に位置する。勸進代と草岡両地区の境界をめぐり問答が繰り返された山のふもとにあることから付いた屋号の所在地をとって遺跡名とした。急峻な朝日山系の西側のふもとには長者屋敷遺跡や北堂C遺跡をはじめ縄文時代の遺跡が数多く点在する。本遺跡は高台の縁辺部に営まれ、付近には最近まで湧水が存在が知られていた。

調査状況 当地区の高橋さん宅では昭和30年代に自宅の改築を行ったところ、高台の縁辺部から多量の土器や石器が出土したという。現在は整地が行われ敷地の一部となっている。このたびは遺跡の広がりや性格および時期を明らかにする目的から、1×5mのトレンチを任意に9箇所設定し、手掘りで地山層まで掘り下げ遺構・遺物の検出にあたった。また、遺物が密集して出土した3トレンチは一部範囲を拡張して掘り下げを行った。

調査結果 3・5～9トレンチから遺物が出土した。特に3トレンチの北西部では多量の土器が密集して出土し、炭化物を多く含む焼土も確認されたことから灰跡を伴う住居跡の存在が予想される。また、6トレンチでは直径約1mの土坑から一括土器が検出されたほか、高台の下に設定した9トレンチからも多くの遺物が出土している。土器文様の特徴から縄文時代中期後葉の遺跡と推定される。以上のことから当該地域は新規発見の遺跡であり、長者屋敷遺跡とほぼ同時期に営まれた遺跡と推測される。



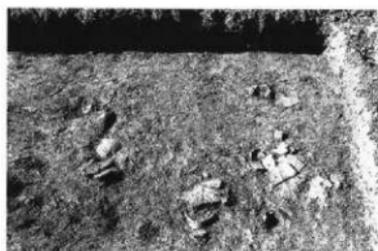
第17図 もんど山遺跡概要図



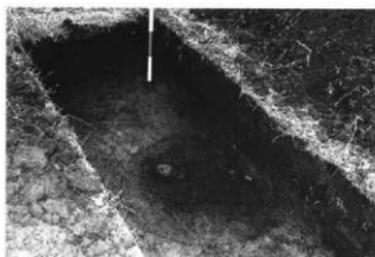
もんど山遺跡近景



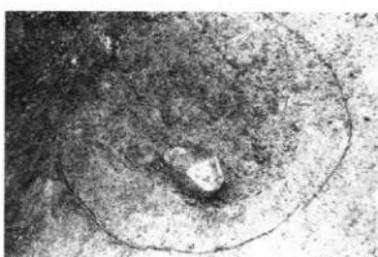
3トレンチ



3トレンチ遺物出土状況



6トレンチ



6トレンチ遺物出土状況

図版10 もんど山遺跡

遺物について

遺物は3・5～7・9の各トレンチから整理箱にして1箱の縄文土器が出土した。土器は大きく縄文中期と後期に分けられ、文様の特徴から分類を行った。

第1群土器 縄文中期末の土器を本群とし、大木10式に比定される土器である。

第1類土器 (第18図、図版11) 3～9は胴部、10は低部付近の破片で、縄文施文部を沈線で区画し文様を描出した土器である。縄文が縦位・斜位に施文され、6は複節縄文、他は単節縄文である。

第2類土器 (第19図、図版11・12) 縄文施文部を沈線と微隆起線による曲線で区画し、文様を描き出した土器である。11～14は深鉢の口縁部破片、15～22は胴部破片である。11・14・15・18・19は斜縄文の条が縦位に施文され、縄文原体を斜位に回転したものである。

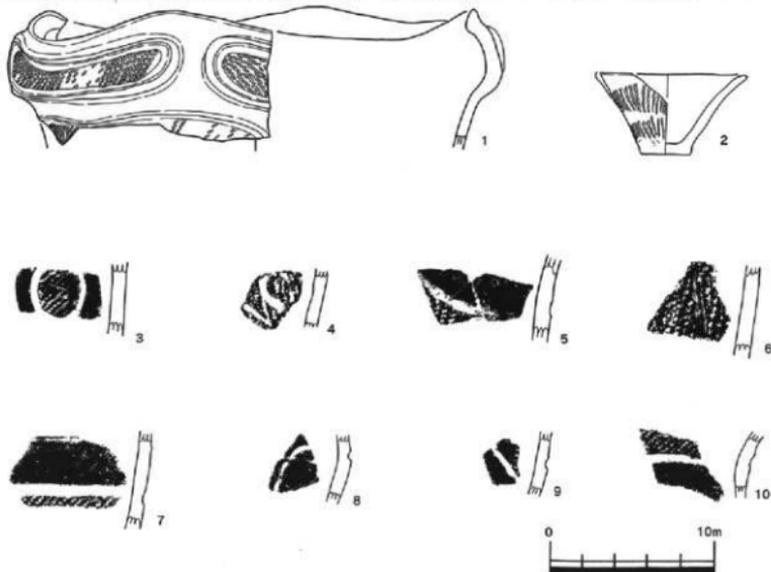
第3類土器 (第18・19図、図版12) 縄文施文部を沈線と隆帯による曲線で区画し、文様を描き出した土器である。1は6トレンチの土坑から一括出土した土器で、体部下位は欠損するが口縁は4単位の緩やかな波状を呈し、口縁に沿って横長の曲線文が施される。23は口縁の内側にも隆帯と沈線が巡る。24は口縁部、25～29は胴部破片である。

第4類土器 (第19図、図版11・12) 地文に縄文が施される土器で、2は口縁が外反する小型土器、30・34は深鉢、31～33は大型の深鉢土器である。35は底部破片で敷物痕が見られる。

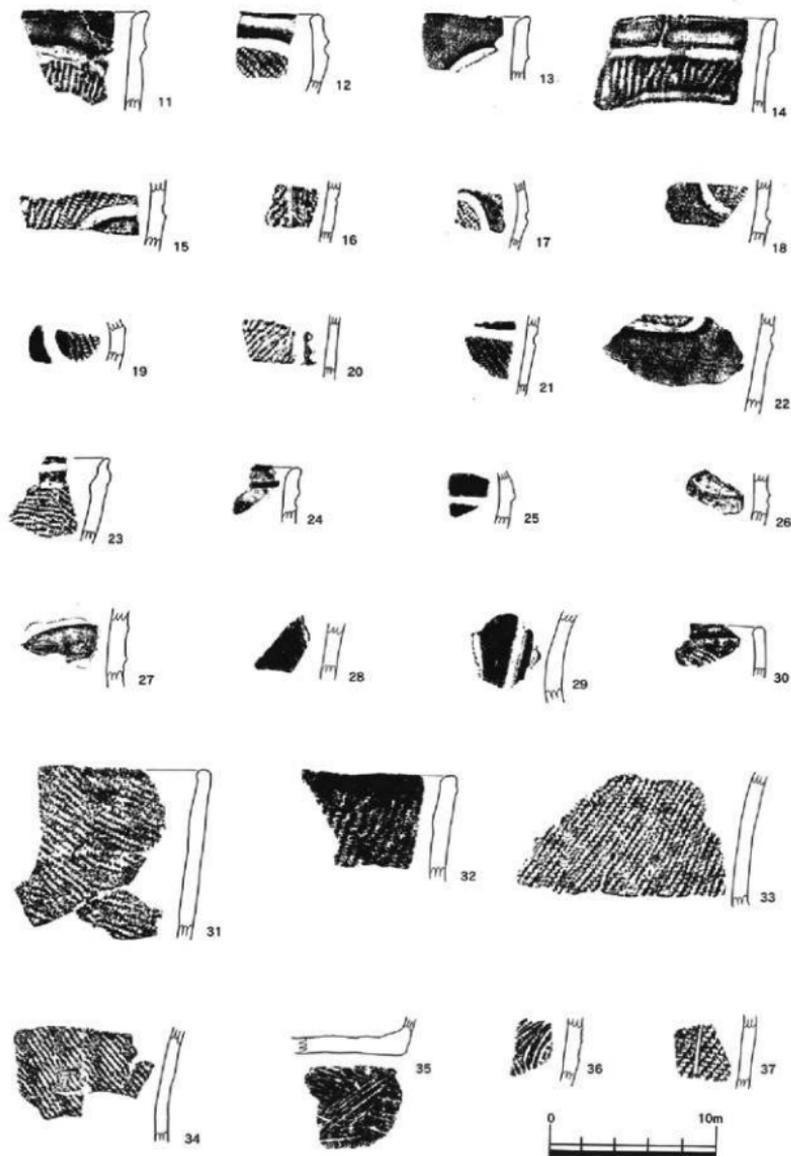
第2群土器 (第19図、図版12) 縄文後期前葉の土器を本群とする。

36は3～4条の櫛歯糸工具による集合沈線の曲線文が描かれた土器で、焼成も良く遺存状況は良好である。

37は地文に縄文が施され、先端の尖った棒状工具で1条の沈線が施されている。両者とも胴部破片である。



第18図 もんど山遺跡土器実測図・拓影図



第19図 もんど山遺跡土器拓影図



図版11 もんど山遺跡出土遺物(1)



図版12 もんど山遺跡出土遺物(2)

9. 中里遺跡

所在地 長井市草岡字中里地内

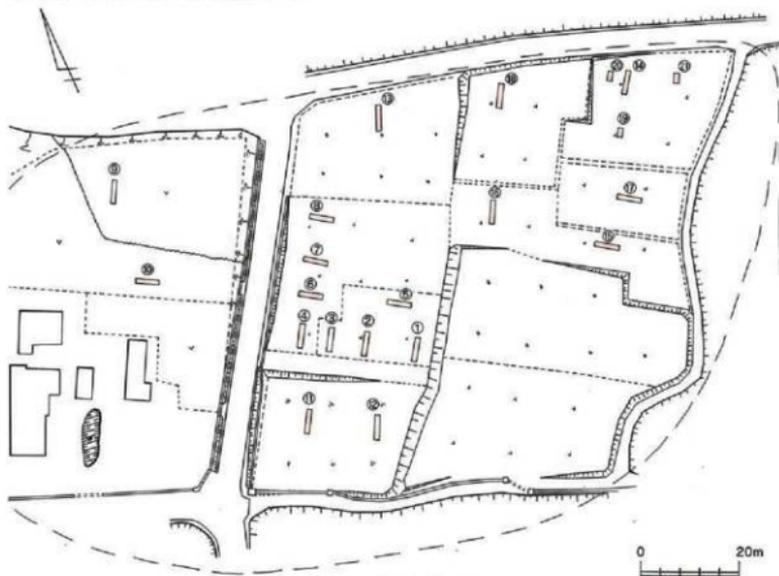
調査期間 平成13年11月7日～19日

遺跡環境 西根地区にある長井市古代の丘資料館の東約200m、久川の氾濫がもたらした土砂が東西にのびる小丘陵を形成した地点に位置する。古くから土器や石器の出土が伝えられ縄文晩期の遺跡として周知されてきた。また、昭和58年に遺跡の中央部を南北に走る市道の改良工事に伴う緊急発掘調査が行われ、縄文時代晩期中葉の集落跡の一部が明らかになっている。

調査状況 遺跡の広がり把握を目的から1×5mのトレンチを任意に22箇所設定し、手掘りで地山層まで掘り下げ遺構・遺物の検出にあたった。また、推定遺跡範囲の平面測量を行い、遺跡台帳整備の補筆にあたった。

調査結果 ほとんどのトレンチから遺物や遺構を検出した。調査区西側において包含層までの深さが50～60cm、さらに中央部では1mと深いのに対し、北東側では20cmときわめて浅い。出土遺物も前者が縄文晩期前葉の大洞BからC1式の土器が主体を占め、後者は縄文後期後葉の瘤付土器が出土している。また、14トレンチでは直径40～60cmの土坑を伴う配石遺構が密集して検出されたことから、遺跡北東部には縄文後期の墓城の存在が予想される。さらに8トレンチの一部を深掘りしたところ、現地表面下約1mの深さから縄文後期前葉の土器も出土した。

これらのことから、本遺跡は久川の氾濫域にありながら縄文後期から晩期にいたるまで、断続的ではあるが遺跡が営まれてきたものと推測される。



第20図 中里遺跡概要図



中里遺跡近景



6トレンチ



6トレンチ土層断面



14トレンチ



14トレンチ遺構検出状況

図版13 中里遺跡概要図

遺物について

このたびの調査で出土した遺物は、整理箱にして3箱である。土器類は大きく縄文中期・後期・晩期に分類され文様の特徴や器形から分類を行った。

第1群土器 (第21図、図版14) 縄文時代中期後葉に並行する土器を本群とする。

3は緩やかな波状口縁に渦巻き状の隆帯が施され器壁の厚い土器である。4は粗い節の縄文をもつ。

第2群土器 縄文時代後期の土器を本群とし、第1類-後期前葉の南境式土器並行、第2類-後期後葉の窟付土器第IV段階に分類する。

第1類土器 (第21図5・6、図版14) 5・6は集合沈線による曲線文が施された土器で、櫛歯状工具による縦位の施文が見られる。

第2類土器 (第21図7~14、図版14) 7は口縁にイボ状の小突起が付き、沈線と縦位の刻目文が巡らされる。小突起の頂部には十字の刻みが施され胎土も緻密である。8~13は磨消縄文による入組文が施され、9・12は張瘤小突起を有する土器である。10~14は一括して出土した土器で、口縁部は欠損するが刷が張り、頸部でしまり口縁の開いた器形を呈する。低部には網代の圧痕が付く。

第3群土器 縄文時代晩期の大洞B式土器を本群とする。

第1類土器 (第21図15~18、図版14) 15~18は口縁が緩やかな小波状を呈し沈線による玉抱き文が描かれ、口縁部には磨消縄文が施される。器形は小型の鉢類と推測される。

第2類土器 (第21・22図19~25、図版14) 19~25は沈刺や沈線による三叉状入組文が描かれる土器で、20・21は突起が付けられ、他は小波状の口縁を呈する。体部には磨消縄文や斜縄文が施文される。

第3類土器 (第22図26~37、図版14・15) 沈線による曲線や入組文が施される土器で、32~34は小型の鉢類、35~37は注口土器の胴部破片である。

第4群土器 (第22図38~48、図版15) 第2群2類、第3群1・2類に並行する土器で、磨消縄文が横位に施され、39の口縁は小刻みな波状を呈する。

第5群土器 (第21図1、第22図49、図版14・15) 縄文晩期の大洞B-C式土器を本群とする。

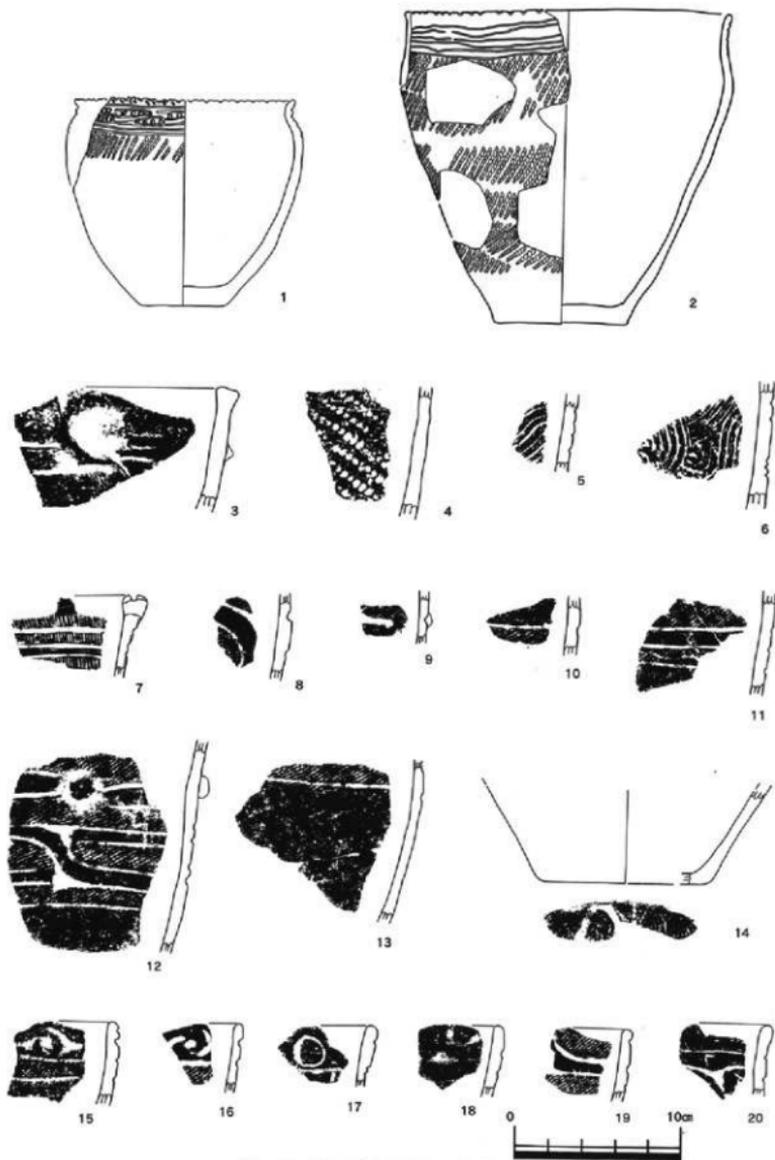
1は胴部に膨らみをもち頸部がしまり口縁は反りぎみに開く鉢形土器である。口縁から頸部にかけて沈線が巡り左傾する羊歯状文が施され、口唇には深い刻みと浅い刻みが交互につけられ小波状を形成する。胴部にはLRの斜縄文が施文される。49も同一固体である。

第6群土器 (第21図2、第22・23図50~65、図版15) 縄文晩期の大洞C₁-C₂式土器を本群とする。

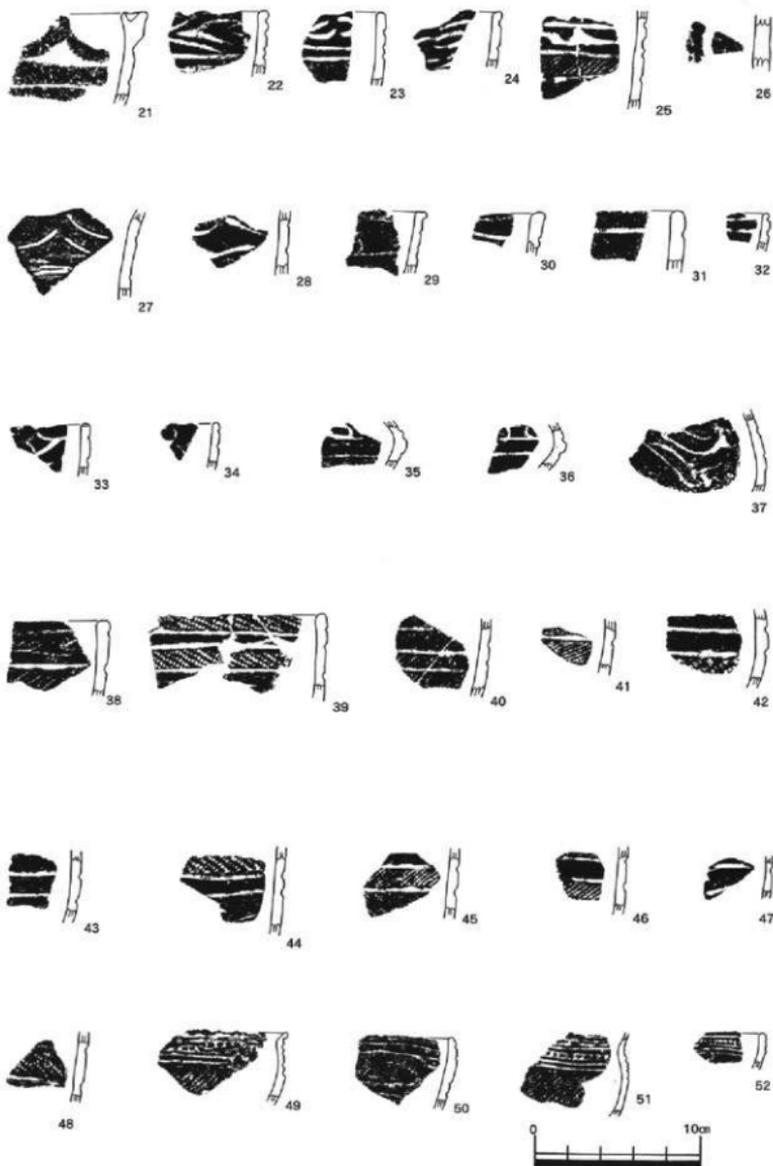
2は胴部が膨らみ頸部がしまり口縁が反りぎみに開く鉢形土器で、口唇に刻目、口縁には5条の沈線が巡る。50は口縁が垂直に立ち上がる鉢または浅鉢で、彫りの浅い沈線で企画された雲形文が施される。51は頸部がしまり口縁は反りぎみに開く器形の土器で、口縁には数条の沈線が巡らされ、沈線間には刺突や列点文が施される。52~65は口縁に数条の沈線が巡る土器や、突文が施される一群である。51・53~55は口縁が「く」の字状を呈し刻目が施され、53は口唇に沈線が巡る。胴部には斜縄文や綾絡文が施文される。

第7群土器 (第23図66~80、図版15) 第3・5・6群に並行する粗製土器を本群とする。

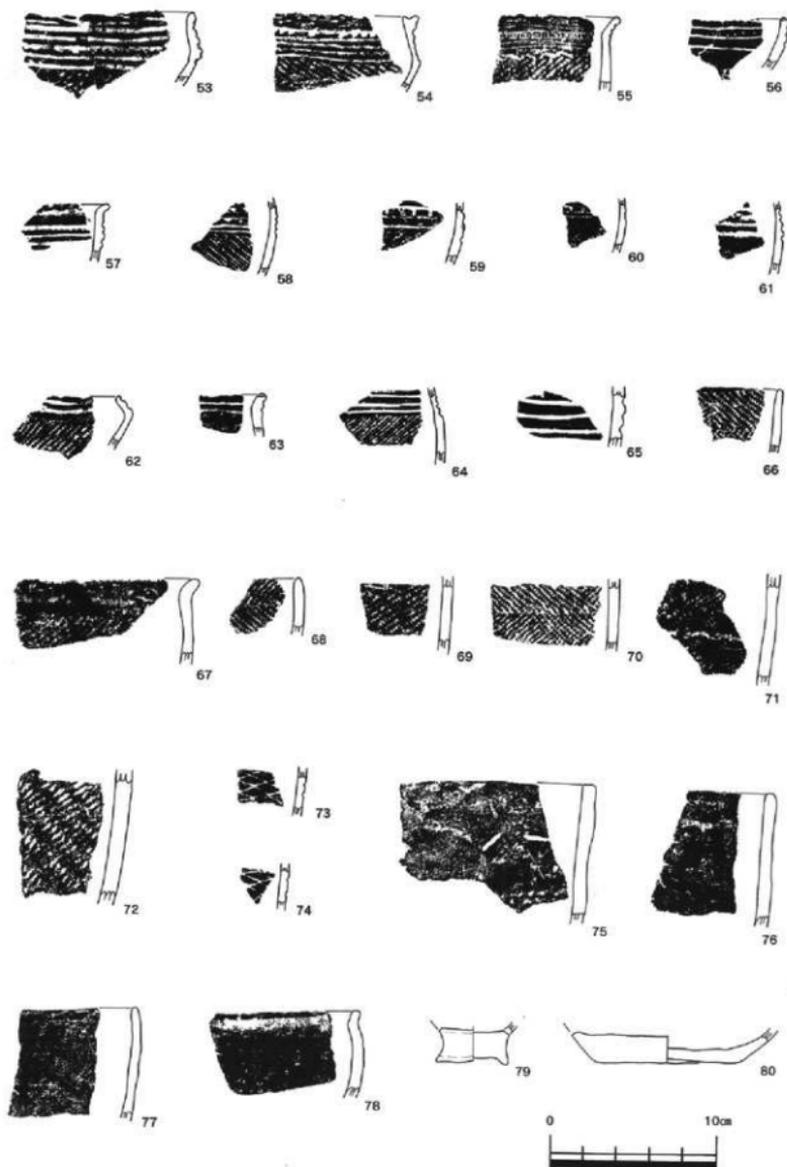
66~72は斜縄文・綾絡文が、73・74は格子目文が施される深鉢である。75~78は無文の深鉢、79は台付鉢の台、80は浅鉢の底部である。また、鉢の底部に漆塊の付着する土器も出土した(図版14:右)。上)。



第21图 中里遗址出土器类剖面图·拓影图(1)



第22图 中里遗址土器拓影图(2)



第23图 中里遺跡土器拓影圖(3)



第1・2群土器



第3群土器

図版14 中里遺跡出土遺物(1)



第3・4群土器

第5・6群土器

第7群土器

図版15 中里遺跡出土遺物(2)

10. 長者屋敷遺跡

所在地 長井市草岡字長者屋敷

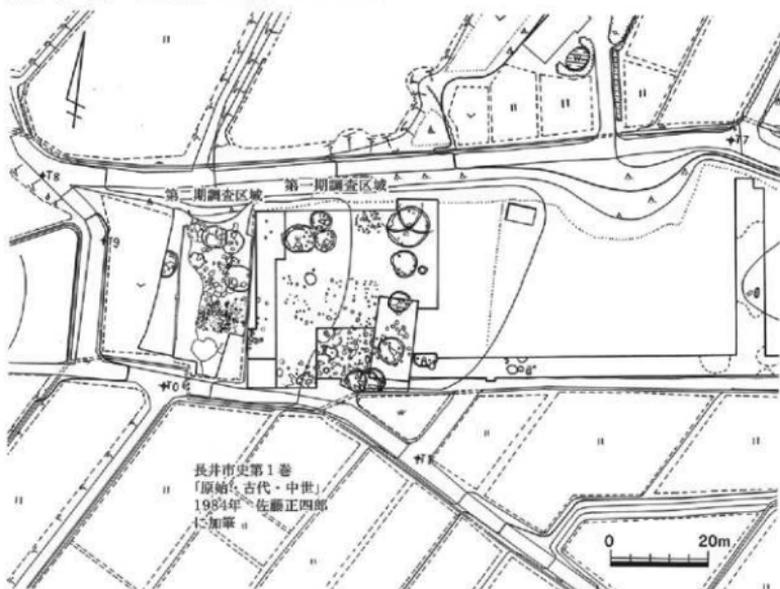
調査のあゆみ 本遺跡の西端部に市道改良工事が実施されるにあたり、緊急発掘調査を行ったところ縄文中期の集落跡の一角から半截木柱遺構が4基検出された。そのため路線は変更され、遺跡は保存されることになり、既に調査が行われた区域とともに遺跡公園としての活用計画がある。

調査の目的 近年、木柱遺構やストーンサークル等で春分・秋分・夏至・冬至など、特定の時期における日の出・日の入の方向と柱配置や石組みの向きが保わりを持つことが指摘されている。青森県三内丸山遺跡の6本柱と夏至の日の出と冬至の日の入の関係、秋田県大湯環状列石における立石を持つ石組みと夏至の日没方向、さらには栃木県寺野東遺跡の環状盛り土遺構における冬至の日の出と筑波山の関係など、特定時期の太陽運行と縄文時代の遺構との係わりがあげられる。本遺跡で発見された4本柱跡でも前述したような太陽との係わりの有無について現地を確認調査を行った。

調査結果 冬至「日の入」：3号柱から1号柱を望むと、2本の柱のほぼ延長線上の山に日没を確認した(図版16)。また、南中時において1号柱と2号柱、4号柱と3号柱の影がそれぞれ重なりあうのが確認された(図版16)。しかし、「日の出」方向と柱配置については特定の係わりは見出せなかった。

春分「日の出」：1号柱と2号柱の間から東方向を望むと、2本の柱の中間地点の山並みから朝日が昇った。つまり1・4号柱と2・4号柱の中央部から日の出を確認した(図版17)。しかし、「日の入」方向と柱配置については特定の係わりは見出せなかった。

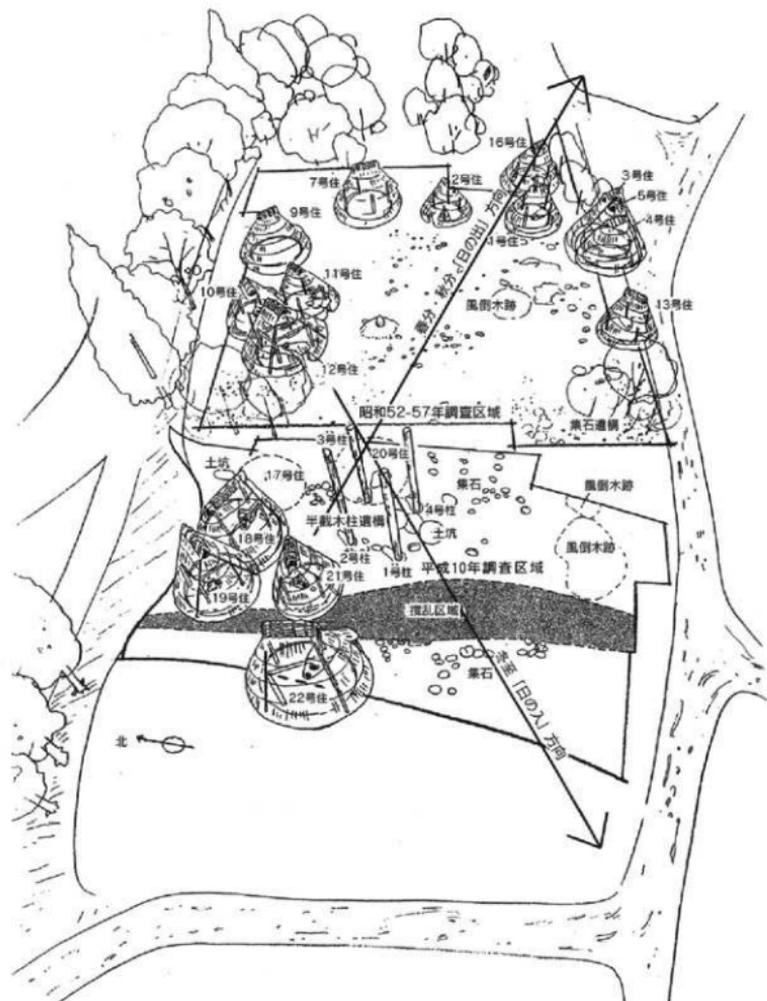
夏至「日の出」：天候不順のため観察できなかった。



第24図 長者屋敷遺跡概要図

秋分「日の出」：春分と同様に1・4号柱と2・4号柱の中央部から日の出を確認したが（図版17）、「日の入」方向と柱配置については特定の係わりは見出せなかった。

以上のことから、4本柱は冬至の日の入と春分・秋分の日の出を意識して柱を配置したものと考えられる。平成14年度も4本柱と夏至の日の出を中心に確認調査を行う計画である。



第25図 4本柱跡と「日の出・日の入」概要図



冬至 日の入 (2001.12.24)



冬至 南中 (北から)



冬至 南中 (北から)



冬至 南中 (西から)

図版16 長者屋敷遺跡(1)



春分 日の出 (2001.03.20)



秋分 日の出 (2001.09.22)

図版17 長者屋敷遺跡(2)

報告書抄録

ふりがな	しないいせきはつちようさほうこくしよ							
書名	市内遺跡発掘調査報告書							
副書名	堀切遺跡の調査、もんど山遺跡の調査、中里遺跡の調査、長者屋敷遺跡の調査 他							
巻次	10							
シリーズ名	山形県長井市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第20号							
編著者	岩崎 義信							
編集機関	長井市教育委員会							
所在地	〒993-8601 山形県長井市ままの上5番1号 TEL0238-84-2111							
発行年月日	西暦2002年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ほっ 堀 ぎり切	やまがたけんながいし 山形県長井市 たてまちみなみあざ ぼっぎり 堀町南字堀切	6209	新規 発見	38度 05分 17秒	140度 02分 44秒	2001.05.08 ～ 2001.05.09	360㎡	スーパー造 成に伴う試 掘調査
ほっ 堀 ぎり切	やまがたけんながいし 山形県長井市 たてまちみなみあざ ぼっぎり 堀町南字堀切	6209	新規 発見	38度 05分 17秒	140度 02分 44秒	2001.08.06 ～ 2001.08.31	1200㎡	スーパー造 成に伴う試 掘調査
もんど山 やま	やまがたけんながいし 山形県長井市 かんじんたいあざなか 勘進代字岡	6209	新規 発見	38度 08分 49秒	140度 01分 08秒	2001.11.20 ～ 2001.11.22	50㎡	遺跡台帳整 備に伴う試 掘調査
なか ざと里	やまがたけんながいし 山形県長井市 くさおかあざなかざと 草岡字中里	6209	96	38度 08分 03秒	140度 00分 28秒	2001.11.07 ～ 2001.11.19	126㎡	遺跡台帳整 備に伴う試 掘調査
ちようじやしき 長者屋敷	やまがたけんながいし 山形県長井市 くさおかあざちようじやしき 草岡字長者屋敷	6209	81	38度 08分 02秒	140度 00分 17秒	2001.06.18 ～ 2002.03.21	25㎡	遺跡台帳整 備に伴う確 認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
堀切	集落跡	奈良・平安時代	竪穴住居跡、土坑	土師器、須恵器				
もんど山	集落跡	縄文時代中期	土坑	縄文土器、剥片				
中里	集落跡	縄文時代後・晩期	墓坑	縄文土器、剥片				
長者屋敷	集落跡	縄文時代中期	半截木柱遺構		半截木柱遺構と 冬至・春分・秋分 の「日の出・日の入」 方向の係わり			

長井市埋蔵文化財調査報告書 第20号
市内遺跡発掘調査報告書(10)

平成14年3月29日印刷

平成14年3月31日発行

発行 長井市教育委員会
山形県長井市ままの上5番1号
TEL(0238)84-2111

印刷 翰サンノー企画印刷
